

卷頭言

院長
宮坂宥洪

1.

令和五年（二〇二三）は、宗祖弘法大師ご誕生千二百五十年に正当し、本宗においても数々の報恩の記念事業や記念行事が行われた。そして記念出版事業の一環として智山伝法院が編集した、智山版『十卷章』が刊行された。本書は「本文編」「訓読編」の二巻本となっている。智山書庫所蔵の堅康本を底本とし、弘現本・覚本本を対校本としている。奥書によれば、頼瑜僧正由来のものに運徹僧正が手を加えたものであり、江戸期に智積院で使用されていた特有の読みが可能な限り再現されている。今後、本宗の学徒が弘法大師のご著作を学ぶ本宗独自のテキスト（教科書）がここに初めて誕生した意義はまことに大きい。

2.

ところで、この年（令和五年）、東寺真言宗において、真言宗立教開宗千二百年慶讃大法会が行われた。なぜこの年が立教開宗千二百年に当たるといふと、弘仁十四年（八二三）にお大師さまが嵯峨天皇より東寺（教王護国寺）を給与され、「真言宗所學經律論目錄」を朝廷に提出して許可された。このとき初めて「真言宗」という名称が公認されたのだということで、西暦八二三年から数えて二〇二三が千二百年に当たるといふのは、一見何の問題もないように思われるのだが、しいて挙げると三つある。

一つ目。この年、真言各派では弘法大師ご誕生千二百五十年の記念年に当たり、どこも慶讃事業や法要等を行っているが、東寺真言宗以外、立教開宗千二百年を慶讃する宗派はなかった。

二つ目。弘法大師ご誕生千二百五十年というのは、宗派の慣例にしたがって、西暦二〇二三が、ご誕生の七

七四年より数えて一二五〇年目に当たるからである。歴代の高野山開創や御遠忌などの数え方もすべてこの慣例にしたがっている。これにしたがえば、お大師さまが東寺を賜った八二三年から数えると、千二百年は二〇二二年つまり前年だったことになる。

三つ目。明治時代に、立教開宗千百年記念の行事が行われた。それは明治三十九年（一九〇六）のことである。その年の六月十五日に東寺と高野山金堂において「弘法大師開宗一千百年記念法要」が勤修されているのである。それはいつから数えて千百年なのかという点と、『御遺告』や『空海僧都伝』に基づいてお大師さまが唐から帰朝されたとされる大同二年（八〇七）から数えて一一〇〇年目に当たるのである。本宗でも、これにしたがって、真言宗智山派宗法第二条に「大同二年、平城天皇の勅許を得て真言宗を開創し」と明記されている。

お大師さまのご帰朝は、歴史的事実としては大同元年（八〇六）なのである。だが、大同二年という年は、ある意味で神秘的なベールに包まれている。四国霊場の一割以上は寺伝によると大同二年の大師開創である。このほか大同二年開創の寺は結構多い。

真言宗の立教開宗年はいつか。すなわち真言宗がいつ始まったかということについては諸説あり、このことについて、かつて論じたことがある（『現代密教』第十九号「真言宗の成立について」平成二十年）。

それにしても、日本仏教諸宗派の中で、立教開宗年が定まっていない、すなわち統一見解がないのは真言宗だけではないだろうか。事程左様に、弘法大師研究は遅れていると言わざるをえない。

3.

明治以降、お大師さまに関する書物は少なからず出版されてきたが、その筆頭はなんといっても長谷宝秀師の

『弘法大師全集』首巻及び全十五巻。これはそれまで散逸していたお大師さまのご著作を初めて集成した画期的な書物であった。次に、同じく長谷宝秀師の『弘法大師伝全集』全十巻。お大師さまの伝記に関するすべての資料がここに収められている。それから、お大師さま一千百年御遠忌を記念して出版された二冊の伝記本、ひとつは古義系の蓮生観善師の『弘法大師伝』、もう一つは新義系の守山聖真師の『文化史上より見たる弘法大師伝』が代表的なものとして挙げられる。また、三浦章夫師の『弘法大師伝記集覧』も屈指の実績である。これらの本の題名には、すべて弘法大師という名称が用いられている。

弘法大師研究の難しさは、研究資料が少ないことではなく、研究資料が桁外れに多いことである。日本の歴史上、これほど多くの伝記があり、伝説のある人物はいない。大師伝説のない府県はなく、たぶん市町村もないのではないか。

ところが、明治以降の近代仏教学の著名な学者や哲学者の誰一人として、お大師さまに言及していない。西田幾多郎や鈴木大拙や和辻哲郎なども、あれだけ日本仏教のことを喧伝しておきながら、お大師さまには一言たりとも触れていない。まさに「升を以て石を量る」（淮南子）のは無理という事態であったとしか言いようがない。昭和四十二年（一九六七）に筑摩叢書として刊行された渡辺照宏・宮坂宥勝共著『沙門空海』（平成五年に「ちくま学芸文庫」に収められる）で、「空海」という書名がつかわれた。お大師さまご自身が、ご自分のことを「沙門空海」と記している文献はいくらでもあるので、何の問題もないように思われるのだが、このことについて、わが祖師お大師さまのことを「空海」と呼び捨てにするのはもつてのほか、というのが出版された当時の高野山全山を挙げての風潮であった。

しかし、これ以降に書かれたお大師さまに関する書物には、ほとんどすべて「空海」という名称が使われるよ

うになった。有名なところでは上山春平氏の『空海』、司馬遼太郎氏の『空海の風景』、高木伸元先生の『空海入門』、高野山金剛峯寺第四二世座主の松長有慶殿下が令和四年六月に出版された岩波新書の題名は、すばり『空海』。「空海」という名の映画もつくられた。隔世の感を禁じ得ない。

今では、お大師さまに関する学術論文で、「空海」と書かないものはない。その先鞭をつけたのが『沙門空海』という本であったと思われる。

この本は、神話的要素を極力排して、できるだけ客観的に一人の人間としてのお大師さまのご生涯を捉え直そうとした最初の試みだったと言える。言い換えれば、宗門の枠にとらわれないうちにお大師さまについて書かれた最初の書物であった。

4.

宗門の枠とは何かと言うと、『御遺告』である。お大師さまのご生涯について語る場合は必ず『御遺告』の記述に則っていなければならない。『御遺告』というのは、お大師さまが自らのご生涯を振り返って弟子達に語った「遺言の書」であるから、これは絶対的に尊重しなければならない。これが鉄則の伝統であった。

だが、実は文献学的に見ると『御遺告』の成立は、かなり遅いのである。

現存する教種の『御遺告』はすべて後世の偽作であるということのを完璧に文献学的かつ論理的に実証したのは、平成四年（一九九二）に出版された上山春平氏の『空海』である。

だが、もちろん、後世の偽作であるからと言って、それが真実を伝えていないかという点、必ずしもそうとは言い切れない。お大師さまが晩年に弟子達に語ったことを語り継いできて、それがあつた時期に、これは書き留め

ておかなければならないと思った人たちが『御遺告』という文献を遺した。それは文献学的には、お大師さまの没後、はるか時を隔たったときに作成されたものかもしれないが、それを悉く後世の作り話で偽造されたものと断言してよいものかどうか、この点は疑問に思う。

お大師さまは、いっどこでお生まれになったのか。宝亀五年（七七四）に、四国・讃岐国多度郡屏風ヶ浦にお生まれになる。父は佐伯氏、母は阿刀氏。この点に関しても最近、疑問視する説が提唱されているが、果たしてどうなのか。ちなみに、ご誕生の地に建立された普通寺の開創も大同二年である。不思議な符号である。

あるいはまた、お大師さまはいっ得度をなされたのか。いつ受戒されたのか。どのような経緯で唐に留学することになったのか。こうした点について論じるすべての学者の見解は、すべて異なる。これまた何とも「群盲象を評す」の格言を地で行く情況である。

弘法大師研究は、実は緒に就いたばかりのところである。